



第52回「おかねの作文」コンクール

姿を変えるお金

福岡県・北九州市立篠崎中学校 2年 古海 真尋

「今、何でお金入れたと？」

私が小さい頃、母がおつりを募金箱に入れた時に母にそう質問した。すると母は、「募金したんよ。困っとる人を助けるためにね。」

と答えた。母が募金箱に入れたお金はおつりの1円玉4枚程度。こんなお金じゃ何も買えないじゃないか。その少しのお金で困っている人は助かるのだろうか。当時の私は幼いながらにそんな疑問をいだいていた。

私は中学生になり、ある日駅の近くで募金活動をしている人たちを見た。それは、

「病気で困っている子どもたちがいます。ご支援、よろしくお願いします。」

というものだった。私も病気があり、治療費がかかる。私の場合は税金が負担してくれるため、治療を諦めたことはなかった。しかし治療費が高額で税金が適用されない場合だってある。そんな人がお金のせいで治療ができなくなってしまうのは嫌だと私は思った。立ち止まってお財布をあけた。その日は駅の近くのお店で買い物をする予定だったのでいつもより多めにおこづかいを入れていた。千円札5枚に合計600円くらいの小銭が入っていたと思う。そのうち10円玉を全て募金しようと思った。でも少し考える。その時私が持っていた10円玉は3枚、30円だ。私はあの時の気持ちを思い出した。たった30円で助かる人はいるのだろうか。30円で薬などを充分に買うことができるのだろうか。その日は多めにおこづかいを入れていたため、もっと募金することだってできた。でも、自分の欲しい物を買いたかったし、そのために貯めておいたおこづかいでもあった。そして私は少し申し訳ない気持ちもありながら、結局30円を募金することにした。

「ありがとうございます！」

大きな声で本当に^{うれ}嬉しそうな表情で募金箱を持っていた人は言った。申し訳な

いという気持ちはすぐに吹きとび、少しでも力になりたいという私の気持ちが届いたのだと思い、すごく嬉しかった。自分のおこづかいを募金したのはこれが初めてだった。これまでは自分の欲しい物を買うためにおこづかいを使っていたが、「力になりたい」と思い募金することでその気持ちが伝わるということはとても素敵なことだと思った。

また、その思いの大きさを改めて感じる出来事があった。募金箱に貼られた紙に、

「皆様のご支援のもと、〇〇〇万〇〇〇〇円の寄付金が集まりました。」

という文章が書かれていたのだ。細かい数字は覚えていないが1の位まで書かれていたのが印象的だった。透明な募金箱を見ると中はほとんどが10円玉や1円玉などの小銭だった。「ちりも積もれば山となる。」ということわざがあるように、母が入れた1円玉も私が入れた10円玉もたくさん集まることによって大きなお金になったのだ。そのお金は気持ちとして考えることもできると思う。一人一人の応援する気持ちがたくさん集まって支援につながっているのだと思う。

お金は物に姿を変える。募金として集められたお金も、災害の場合は衣料や食料などの支援物資や道路の再建にあてられるし、病気を治したい人には薬や医療器具などに使われる。支援やお金を必要としている人が自分と直接関わりを持っている人とは限らない。しかし、どこかの知らない誰かでも募金を通して力になれる。私はまだ大きな災害の被害にあったことや、支援が必要になったことはないが、これから何が起きるかわからない。もしそんな状況になった時、きっとその支援は私の助けとなり、頑張ろうと思えるだろう。

母と買い物に行くことは小さい頃に比べ、随分減った。そのかわり友達と、または一人でお金を使うことが増えた。自分のおこづかいでやりくりすることが増え、自分の好きな物も計画的に貯金し買うことができるようになった。でも、おつりの1円玉でもいい。いつもじゃなくてもいい。エールをこめて募金をする。自分一人の力は小さいかもしれない。でも小さな力が集まると大きな力になり、誰かを助けることができる。大好きな33円のおかしを40円で買う。おつりの7円のうち、2円を募金箱に入れる。これが私の活きたお金の使い方だ。